



貞享式海印録

忠
諫
名
所
神
祇
毎
常
乾
坤
時
分
時
良
季
雅

三

5
1117
3





貞慶海印録之 曲意述



意

本國意のちの式を用寸其原様振治部頭様
の文字意目とて思ふに只此の意は
あつた文字に拘寸意を添へて其意は他
意を白くするに非は思ふ風様の花文字
意に二つより五つあるに先づ二つは
陰陽の乃理を定むるに文字意目は拘
寸情を考とするに非は思ふに其意は
時々必あ致の程ありて傍て一事の要化
拘る意は多ク二つより三つは思ふに

強て字原の服之法は任に強りるに
いれ強てするものを林ありて其意は
とみ思ふに下は意を強る法とて思ふ

今この世にも思ふに五つありて古抄乃



つる意の向は並へいさまの社意の仄ありま
似守化社の傍の平落りて女子輩の身は
もちて吐するもやなき出ちあひむ上野

第の先はされやとほ枝

あまやあまぬ人の信れあて

若者の作老は又意のあはれも後の作老の眼
力より信りて意の深情を又分るれい彼と
承るの二句と等て意を決て二句とらふ一
去風より一白持と思む昔のうらまを二語の
意洞あて又次の読もあつるもあはれは隠れ
詮するあはれいんよおそわあはれとて

會後昔の懐五句の句ととも意のあはれ
一思といふも守備わと守かくせう大切めわあは
皆意の白は泥に僅二句一和は出の財の幸とて初
て世中一色白緒と又多く意のうらまを
心ゆく一思不業はあはれるあはれの出射さうむ

財二句のねるもあはれ守さうむ財の強て守す
とも一白より一和といふかひも何卒意を
もよう意のあはれ出さうととも守るの始

▲意は二句の意の初るも出さうむ意を決
て一白より一和守又意のうらまを初
んのさうむ去来何かはあはれとて抑ては意の
法は信するも今もは又あて意を流ぬ人多く
意カ仙は二和より一和とて意栗アアアアアアアア

●白句より一和より一和とて意栗アアアアアア
而句より一和のあはれ梅は伏化遊音のし
●無意の意のみにむさかすは湖集書力行 梅十花
十カ仙皆く又カカ仙は意の意の意の意の
保氏己上より意の意の意の意の

●執意無意の意の意の意の意の意の意の
お中へは君臣父子夫婦兄弟朋友の意の意の
かすく身とては是後世の集れ意の意の

されは妹せりし川あてもちろ人の伝通ふ中い
 玄家ゆらふうまひあむ毎意のまよは程
 あり或は父子の情或は君臣の契を流するを流す
 るを流す流すの迷うごとく其隙をあらは意のより
 へゆく道おもむくあはれ入るまはれあはれ流れ
 強よいとて止ると見え九字道の心は未だおの
 き時より其日の挽振を拘りて席は流く介さそ
 白出流字りおとを流りて流るる工流りて又
 ま流りて又流りて守神秋意意若くは依に李
 月影の配未流更も油ひきとくも連流の心匿
 むれいも流ぬ事あり或は懲り或は勸り又其を
 矢寸違ふまは流尾寸是天程は流り正風の
 流り如くはくも去意多意程との趣席毎よ
 事之必古例を概して已に拙き流り去意の流す
 るゆかえれさそて流する若くあきよ流せむい
 いを止める方流るむ法の流り流るるを

△意三去

去る向 七及多者

又この恨を文よ去る一

流

舞う爪をむむ袖乃橋ま

叩流

髪おろす侍屋々始表て

桐流

面白のた女の杖のおすうや

流

灯火の風を思ふくみ四

流

川せゆく聲を角に結分て

流

舟よとて舟よ登りりり

流

松尾風の直は流く

流

初秋ま思もくぬ男を

流

作ていするの傍のふり袖

流

を乞よ去の心を持せそや

流

目の流は先千ふきてやりて

流

お母出守れのきむりさ

流

女子をうりがお思あ

流

頭博のん中吐一をん

流

疾者

十あう古き即いあくと只り年
痲の意個不りて足せらう 二居

三突

たぬ予をきて意せぬおを 伯免
あきあてし袖ひく合意 甚二

三正

意する天意よ意のれ合 涼ト
おらよめい悟氣もあて柏子抜 杜草

ムツ

世の良あをれぬもちよあき 枕りし
頭博も僅し依後の松板 杜草

読ま

先博しめせん文子入 老龍
ん中ひより行きこころ 九十

△意字面去 古におま

化取

意の土手せお腐そおまけ 行幸
意の劇あきあて人おあり

古拾

お代もすする文の意 去位
意許沼ふ志んあも指上る

一 次

ひんか意をりりやあて 暁 鳥
意衣解の袂もちりおて

ムツ

意存やりの袖を賣り 御立
岸白し意を岸も換り

大粒お目を細くすも 意 二
手かてあていさるあぬ意

白

珍ちきい爵と意病 ばよ
米樹のねんきく意もあ 林を

勢百

飲まよめて人もあき 水浦
園の地意も意のたのり 反朱

氏意

意すりりああ 確 終日 有白
親又の謂て意忘まん

意福もも白志同 依を世意の使あきあ白

子投込 意 細くする意はよくいめる意 思 思

意あてけて意怪あれいもさうと 思 合

りそい意字出おまかて 拙し 夜令古 係あり

とも 又は失を捨て 思 思

△ 淋意意字意を裁不極

猫麻雜の妻意或い親を意友とあするよの

意字の意の成を憐すその憐の意を去
あんの美生美用の意字の憐をのりて

七き

・意とする麻の角の丸あま守 一才
以るの果乃小柴極より 之仲
あつちやまの手にそぬ化ん 己冬
さうしん候掬よせきよ 朴人

△意を憐るんは

小文 秋抄の文て床とる傍とるも 史邦
は秋抄の月草のうらひ奪きる法抄の振
傳れて一秋の意は袖をひちりむとて

百里女侍舟のきぬぐ 三和

振とて舟と振命きぬぐと作らる傍の意は
伝とるる作とる舟の工支之伝陰陽二の意
傳とるも其傍は舟未意信ぬと舟字を替る
よ八船及の傍をよ彼就意の契と結しを
只尤うぬ吹風よりん片帆はあち振とて

秋刻しむ依村木の片名 谷水

村木様の舟長といえて志れむ依よりる意は
字のぬるあるむ安と変化の意を替るは乃
師の潤とれもやき力を入るるあむと意の
あるせむの次の作とるの拙とむと其傍の用を替
何とるも依村木とるも四屋三人と集るる男の
被お局と梅桑の光をすもむつまといと
棧の意はるへきたるよもあく依家のけさた
えて只あふ意ありとて

妻も居れぬ中か生極云 邦

とたよりた女始と意ある次は別意下足之
之の園意と妻侍は恨意は其の初意は其の他
意とく婦意は八の園意は初意は其の初意と
振とるもよ意信と替と振向と老少男女貴
妙法弱又貨と意実を令と流ゆく付るる句
千白とつとも妻化白とある

△恋をねぐる言

凡恋を流るる白面は恋法ある限之候令分合
るる白面は深き恋法あると一と教へたる事
ある白面は浅き恋法あると一と教へたる事
も自然任之人等する法をある候と或は縁
なきは之候と流むと一或は流法ある白面を
控へてあるの本意を失するあり事く
己下は奉るる恋の終の付白を考へよ

△花は流るる言 卷〇月 七ノ有

花は恋を仕るるは法あり割するは古武之意門
まさらるるあり花は仕るるあり花は流るる
あり花は流るるあり何れも二流るる

書九。あの目も恋流るるを流るるれ 翠花
花は恋を仕るるは法あり割するは古武之意門

△流るる言 恋は流るる言のつらきよ 菊
△流るる言のつらきよ 菊

は恋を流るる言のつらきよ 菊

三正

おれは流るる言のつらきよ 菊

ひらくと内をわらわらと 及朱

まのまの恋を流るる言のつらきよ 竹菴

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

まのまの恋を流るる言のつらきよ 乙由

新妻の後姿のおももき 正妻

新妻の位もよりそや

三ツある恨と恋を月とを 少風

我人も束の出代のまに 京水

あつはちの君もむの敷 花と

梅と柳の甲より休み 奈那

池の冬は序の望をまじり 茂林

あまの月を眺めて 吾仲

人の只は角おとす麻 小妻

難はあむむの新所来て 一物

又いあるく柳山吹 世明

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

△新妻

只新妻は思ふ言のふと月をあつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

あつはちの君もむの敷 花と

△新妻

あつはちの君もむの敷 花と

をきよるふかれと祓れりさるる世の白を
又くはあは毎に相まあれと噂の度は釋とあり
居座お初め發より目を空むせたる又と峰き
今更の仲若杉よりけり愛なる卒を語り夜日
別揚の夜合婚久あまき根引別文の志引
起し伯父の笑えも少入寸果に勃弟の男の欠
處ともゆひも浮世のさかあれい文人の落ゆく
云のそあ寸まきりも他社とらつるうそ
も意の中結る休き人あつむ

難 歌く拍子よ字もろく 佳六

は初めお女の化粧初やあまそを懐ち歌く人の
必別度の妻あれとさすうふれ乱る容を恥
ぢむはは哀を程々の底を打抜く文人と
ふよそ見初より美人の曇る初を伴う

廓へい来はる寺列女傳 竹吉

となり愛と妻の姿を看るは廓の信初され

い列女傳の人おまお初めお女の妓女を對し彼初出の
娘女よばおとえせと名と洒落は情を後して

菩薩あまみササとわく 柳柳

井よおろの界と合る略字うそ彼極楽の
尤お井さ之大和の飯久よわきて身初あるを
とあ白へんをぢせり又一妻を看るは井字
控とをさされ愛もは押初と高字乃の口拍子と
又お井よさくは茶居の口合はれはは大杯お
たよ初おと敷て一層と名す初を伴う

歌子成居も筆末の思 如角

かく張るうは白廓を切すして妻化白年之
かる白法をゆるめり方丈をたうと千のさき
法男を捨して三ッおは徳むへー

雪の粒集のふれは改めき カヲ

冬 杉よさるけり斤袖をとく 若
化人と杉を披は吹なきむ 五五

お母に女入田舎ワ〜ソラ
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

世世二不守財ハ〜
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

変化ある何の思嬌〜
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

根本 彦志 彦志 彦志 彦志
七平角 彦志 彦志 彦志 彦志

文三 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

文三 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

文三 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

文五 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

か三にむと読とを白お及変化い〜

△彦志

今世の彦人の所ハ大方子中凡もあき〜
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

彦志 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

彦志 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

彦志 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

彦志 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

彦志 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

彦志 彦志 彦志 彦志 彦志
彦志 彦志 彦志 彦志 彦志

△男之

男之亦手柄其のくらの表裡まじりきりしを
あてて只情哀しく作るへ

侘

むりい吐く治席あつする 許六
きぬくら男の陣の泊をきて 翁

恨

灯の楽せしる借た妻 河差
治席の敷く抱ひくする 小人
帷子と秋のゆきまのきめきて 市仲

零

美尻の念忘すつそ袖乃為 釣壺
陣の声とよその 忍 森 き冷

底

小房交あつ一博乃う所 去来
いふのちんくと起る元乃事

長良

菖江のをそくたむ暮生 呂杯
合あつあつと張るの程細く 羽壺

仇あな

古登忍初さる 尻乃とく 佐後
治席拵れ致乃うつり事 佐幸
△乞食意

古拾

星牛の末葉あつ守にワヤ 千来
狐とやきと合の妹せむと際 信徳
雪のつて花のきぬく 三翁

枯白

小頼の情ききぬくの月 高丸
松のあつまて貝もせ貝 支考
と合をと事と文ぬくく 翁

車掲

さへ向るせ中の言をおね 菴下
菖江くくあつさき音むし 可柳
と合の思乃通冊子とある 三翁
海見のあも日 徳川 秀东

△盗人意

七子翁

春掲

明子おとろく行敷の陰 た雪
盗人ト連そと妹と文をばて 三翁
ねもそぬ冥の 神 ソラ

草

古古の尾さくする水あれ 己百
おなく 葵の盗人の妻 梅樹
涙より雨とあつと養をく 秀登

星 秋の夜更け乃又下院是 里紅
浮舟人も高き忘て袖の裏 采巻
お托のワラに乱そめうー 甚二

△老の恋

老の恋を伝信くんやちせあき熱もあつて一平
まうーの杜乃を思ふ方もあるー

妻

お島の子も袖のぬききて 三羽
老のちうーと娘布ーくろ 借川
人志事守志くが天意に神あり 念是
着るんやうか情なきね

骨

緋をいぬぬも有るんさうて り取
後の女房より手隠す ぐ 嵐枝
臣君もちと美さうと 伽 白史
未初夜もあふぬむのちね好 由之

△後家恋

ふやせよ美人の姿おとろくて ソラ
目あふる日々お望まうー 美英

拾

拾

泣 秋風す晴の状をさちしー 湖水
雪見桐す宵くうの中 青井
雪見す云沢りあ髪結て 大膳
男文す集る 三井ち 持路

世世

後家とさくさくお初てき 正白
初つてあ守の言りきえんて 菜小
後家の病乃行よ名のくろ 林坊
お友の小袖すあきさおあむ 支考

葉

木更路のちりの文も再く 相之
古忍のやりまともりて思き 幸角
戒心あつてあふる 哀人 占巻

雪

雪 雪原料は志ま帰てさう 李夕
雪原へさう精を起ねえ立人さあつて時ん
のうらるる風くると古きさおよやあつて遍
照の伏せれて雪原草の姿をちて

ふよめくをきるとつる甘原む 和巻

と付たりき二番を揃すもむを折るい葉茶房
あきい女亡入いそ来末と葵一申とえて

ま向のお乃ゆりぬ中 南に
枕白 ひより嬢の文乃まりりく 伸子

まお男やあふ引之て冬梅の陰ある懐む人
のさそあむむ早島田の病あふりうさきも
死ぬきの程と女化人の匂を作す

名木の刃きも隠さぬ思きて 貸水
と付たり信あらの志を志つめて准さる名木の

あめとまうく只者并あの新登うそ女たつさう親
名を契きもさむむししおまの元の夜を怪て

候くくむ稼落るくし 菊
と付たり其社の観おろく女女の室信あしむ

△信恋

信の妻旅らぬあふ只何とあ作あしむし手細
あ信信を為す件のもんあき口のあむむ

山琴 恋ありや信きてすくぬらう 柳士

ま官信の中よりかをわく甘きむの初ま置も松文
てたにをあつりして今あうらなけりうま惟も
ああむきあふ彼重母のつと親御き女と又ま

男麻さく思あふしぬ木履 香次
麻とい山中の旅あれぬる木りの人お博の程山

屋女中のせねたとえあふ只傍よ思あふ男博お
足門除あふ何後の法師あむむ女持の類と述て

ま信信あふくはそ草鞋 巴弓
と信所の情と他より思ふる作もホソ

本物 尹い思乃きくの類とや 麦士
はらの海にま血と懸りて梅つ口合する駒あしむ

あいつ信の信あき先と粒けきとれあふ又女と
信をさすうきま通人のお合と入て

お行よ粒けきもく思きて 壺平
次もも字を替て衣りれ忌も扱する俗者拾と

● 夜おきまあぢ

又さ又た工うそりの歌とよめて

扇を隠すはあゝの留と 涼之

とくうは扇いある人の記念を

初意う又くすもたぐし コセム

口をきれて傍の 婿く 扇

枕灯を隠すはあゝの留と 厚子

地をするをうり 聖のあう袖 ソウ

五人天台傍と きめきて 石乘

はまり又るは 葵も十八九 五桐

はを破るは 邪淫あ語も 午御

約りのまを歌け、小性流 辰化

糸号とまのまをすりの意 支考

一鳥は二之意 什り 万子

三鳥のあち〜は 味子比丘尼 呂凡

ウまの物くま 虫とせき松 化

あれやと下子を笛あゝる 詠柱

△ 登心歌おき

葦

鳥羽玉の髪きる女髪よ束て 町信

虫を尺破る物虫の月 扇

意をこの種念山の奥深し 冬信

去布の夜を白く風葉 扇

矢く教生はくおうきよ 秋人

尼まあゝへき 芳のきぬく 口通

月影まはるまを透りて 扇

忙しう又すりし 意の豆葉 辰村

接まわりの候つれあき 許六

尼まあゝる 芳のきぬく 木守

△ 心をあけ

は乃月後葉折の山影を 扇

屏の内女おあ乃 高 信孝

はるまじ息のめく 舟の袖栴 杉凡

菜刀の先は恨いそ 守ま 扇

後葉折やお抱乃 高 扇

仙傳子

一ま?

△下女

氏名の法と服言の世の表あれより最ありき
 九つき上品の意情いんまぐ律法く哀も仍に
 昔お法のまきと氣なき上の種こも海の成を
 大さ妙の刃よそあめれさるを我早の刃を
 是て信情をまじい依老のんあさまあじり
 八夕 際まき名吉乃の表乃所わて 之川
 コハまは後三そーユ余をまきを括まうして
 花のよゆまぐ似氣ある孫も定寸あ一人又一人
 一訓一き女一又ちてあ一人の信を依り
 松のたすけ持る意もすも子 一人
 只新初名の抱く下女の信を流るる海よりまき
 古大方二もまき止りさるを次の作志の思
 けりなまき女坊に文信を二愛
 登志のふろくとおを只初 一
 とたるあもあまかと仕き一化松は情まきの

うろくくまの松山の傳表も登志ハ女坊の
 登志松を枝まきして袖も敷もまきのまき
 海あまきの哀まきまきく作の叶いとまき
 原氏さ衣の信を流るるまきまき

一歩

我月の小松もたらも登志の
 とくと思根の下女い言す 似去
 得法おめ信をたてぬと 信

次句

竹の戸を人まん下女も登志て 九九
 おそ孫も恨てくよ 信

松白

際まき一妹をあつて今まき
 信くくるまをひいて信く 昌碧

信

よまき一抱くくる麦の粉 信
 まきをまらまきつき丹戸のまき 信

信

月秋も登志を信くまき
 又るまき帯一信も 一板 先放
 君のあつ我信すくと冬も末て 去末
 又候橋のあつまき乃哀 支考

△幽霊といふ哀

三正 白々まいてそ 幽霊のさしこ 及朱

白々いほ 裸力を召れ 女の情なる指と足立

けおれけけ 顔目を失て 行惹

あつむまは けいすれお乳の人と又て
系ホウ 痛も度力に存 乙由

シ、 幽霊い木りをもちて 杖立てて 丈志

哀歌の雲より 迷ふ世つち 素枝

コトなき方の 老号と成あつち 煮のねもひきす
ぬね毎くの 函路を哀く人の 眺る指と

山中 新茶古茶より 君ら一云 由

二赤茶より 先お茶と 指出すをさしこ 一

二赤茶より も 君ら 又と 悲なる 又枝
大虫のね山より 又お入の 悲老あつむは 女

えより 一おあれいさや 女の付さし 一行
つちの物なるを 傍より 無する 指と作り

新茶より 翁押あつち 哀をて 漆ト

お茶より 出後 二新茶は 初よりして 指と指
其は 真人の 心根を 明くさるを 次より 指と
ある 化意の きぬく 二新茶は 指とえき

お乃乃 侯 面目もか 一 枕ぬ

とけさるい 加りき 杖立てる 二さるを 度より ありて
ある人の 面目もき 姿と 又さる 二は 女のもの

踏きつ月の 冷く 化移る 後象の 入陽をの 指
うねおの 化を 迷て ああさより 二は おり
来し 葵も ぬね鳥の 声より 人目を ちて 己ら
はよちさる 孫を 袂衣の 白く 一き 指と作て

幽霊の 階子より 消る 白小袖 里白

山琴 新茶人 落し 後おの 音 呂仙

二座おり 忘る 幽霊も あり 反上

は怪きおきき入るまの梅もされてあやうをえ
るよ戸口をくく押めて次のるますと入る
伏さき白く冷さき父の毛は立ちあがり息を吞
て襖紙の指さし仰ぐよ女同敷の髪を敷して
おろす旅さきといぬ冥あてかれあしみの御座
お禰あきあて末あてはさの終に抜出し
あすのほあ人の父を只敷て後ある夜合する
らむといふもいふ町をき法せの寓居のうき
一字の意語を用き你文のおきよ幽天世詞の
海を立座おりよき出 伴と見え二らのるま
その哀を合さし 伝令あ方の情し一字の海を
とて作の付いあ事と種もいふはさえあむ

△お後同敷向の哀をさる付い不苦

ぬ娘又分る意のいちまき 嵐雪

小系木木そ男をさるる キ角

祈 麻衣
味あさきと草のさきさき思ひ 勇

今アむと云いそくし林れて

火燈をい出すはあすり 角

ぬ娘又わくはえより又今くきさぬの女
あむる門小娘は白帯ノて髪もそりき
小系ぬ指むむをさす下ハ足さる人乃
只まろく指の次い思本をさるる用をみそ焚
とて立白と梓との中よき春風よおきこの男
の差をさるるさすつれてはすきさる指の後の
床い全竹恋あるを次ま竹作の恨と又ま何友
まさく来て冷きさる指守あさき友をさせ
るや海をくく戯又笑やまらあしはせぬ云
訳して其眼は思余うとお家る指をけり

捨 悪むる戸を鳴くひて枝をまね 世水

戸 妻戸くくひておてくうぬ 翁

你 伏すのさきを入おききく 曲聚

カ子 待る方のさきりさえき世の心 西巻

市名

死うとら契あつてもあ大子 凍ト

今又候 男ちく生 乙白

小町あは山姥あつ井あや 乙由

赤ん小袖一 巴山の井 白

月おし独りあつあつり 由

雁乃のよも恋いせお 乙由

業平も格をあきう衣 水吉

けふのよも尺十の 老乃候 ト

ちんと格をきせて足せふ 昨夕

さるおの形うつてもおん 先放

てんうが後いあつ種とあり

乃きまてまの志れぬき思 枝奈

きりて来と教子れお思 厚お

きまて返ぬるけんせん文 字重

らんうづく文をきり 字那

玉事の祈より取く思草 支考

傾博の文すりる掛 月 信凡

真

文

ヤ

只

日

新舟

否お子恋も仲のふ舟 其草
つあうぬ舟やりんき仕お けお
△恋の老

猿

眉掃の巻うつけ の白家 巴凡
昔情と帳の裾とく 仙化

表

小頭博りてあつむの巻 キ角
既巾をうりよ飯の燈お 陰石

恋栗

白我や来ぬ一秋吉奈天の何 嵐雪
名どりの夜表又よ草白 角
花の宴の宴山文のすあり

鳥

初恋のむものいもてありり 葉太
もぬいの恋乃君もそふ枝 独

西東おあつる 花の斗
梯をさつ子貴れり眸

け二倍いゝのうけ続ふ

白友海にて針立き一巻の尻 秋之

歌 運思貫てまの袖笠 十角

名 号うんのかゆり 新巻 之

奉 上下の巻はおそろし 古吹

三お二折衣続後折旅続之

△ 歌

白 家子烟をたぐり揚を早 糸之

松めつゝまね子ひくく 胡布

浪 頭博の果名髪を合入て 其風

版うあやう猫のせりき 糸之

洗 月むま青小袖の袖せむく

かたの情を 出代はあ

あつとあつと又て巻の情と改なり

枕 若公女中の供子 雲巻 りね

矢おの八卦の巻をえちうく 七百

若き女の髪ぬ連束と矢おの占あむを更易

老の子合点し 村人を尋りきりて行かうコハ
はあふと人々をいれし 作巻の巻あつと又
かかたう一巻を尋りし 由る白き長巻之

ちりくくと 矢合の白き村をち 伯楓

椿 振入きいて巻の口 五

八卦の巻を向うく 研さ 蓮二

あつとて ア乃 振 行書

そののくまの二世うらよ 五

まをく文をい風の次ちし 仲志

おやうくとも 母の巻をお 有琴

よさうらよ 折杖さし 梅光

巻化巻は 巻る後巻のおん 而

まを 返るる 洗くくの巻 秀

梅十位十位は 巻あきいかる白くは 号巻今うる
巻をあしり 村あつと巻あつと巻あつと巻あつと
巻のうら 又彼一巻は 乃巻を合するも 後白
よりきて 巻あつとあつと

旅舟歌不題三首 古八三

旅舟は重なる波に及てぬ寂を至とす乃の傍
りも旅はあれは在旅乃の舟も程さむ人の風
程は是来あき時とわらむと宿室より舟
んは程ぬ舟の中は水波にさうし他人の旅
情は疎きいさよ舟の意情は疎きいさよ
さむさきと吉屋の水辺美極まの傍に宿し

丁也く言や白子 若松 翁

ひき 子アよむむの盛乃一刃田 孫成

カミ 吹れ死る 乃の師を 曲水

旅舟 又虫てねむ候了らみ塵 箱

おひく 旅く 只さうり 白

乃乃地旅は 樹くもや 教生

入おす 船の声も 鳴交 ソラ

舟を直し 空年暮の舟 小枝

何の用やら 子ア言ら 白

有琴

梅十 今の世は雨さむの月とむ 梅光

旅りの内いさぬまふ 七

旅人の 風さむく 去らむ 水

佩も ちすね ち刀の 鞘 箱

月さむ 旅の内程の 司百 石

舟引の 紙方を びきり 舟

款の 門は 二枚 舟より 舟

舟の 舟は 舟中の 地旅 舟

連なり 舟は 舟士の 舟旅 舟

旅の中 舟の 舟の 舟旅 舟

舟系より 舟客の 舟旅 舟

舟き旅の 舟の 舟の 舟旅 舟

舟の 舟の 舟の 舟旅 舟

舟の 舟の 舟の 舟旅 舟

舟の 舟の 舟の 舟旅 舟

舟の 舟の 舟の 舟旅 舟

江戸 木段子たきむかしの羊 風草
大和 あら出てうきとくき苦を出せ

七き 及後、磨もきき守 麓山 舎仏
乳のすくく 品もきれす 之仲

△名は地名不名何と強子三云
松風の雲井志後冥うる 一イ

△名は地名不名何と強子三云
+ 軽う 信くきき 崎の月 仙呂

+ 是うの 便より 約瓶 類 生柳
+ 有るもの 寸二 抽ひ 出さる 衣冠

又 靴して 是の 便きく ヤハ
△ 穴村の 東を 向く 戸 及 危フ

△ 又 靴して 是の 便きく ヤハ
△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 伊予の 名乃 群子 川 幸方 る村
+ 妙月や 舟を 運ぶ 幸乃 之 お前

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

△ 舟通す 木跡 杉の 幸田川
+ 舟通す 木跡 杉の 幸田川 有琴

月を紅の宮にうこすり 支考
あらしうとち猫さうり 丹也

横松をさうとてさう渡出る 空芽
後武治法成の行ふあれも地名あぬなる苦

有れ名・夕月の海へあられと海峯ち ソ竹
町屋の屋の都るまじくと 赤ち

三法もあゝの初のスーウ 意竹
おちあを西へ清しん 庚洋 柳士

徳律のまじり 雪屋 昇南
あそもあゝ言ゆの傍の秋意は 涼云

花も咲下ち所へちりは思 花把
夏大根の 枝の 逢る所 依幸

さあゝ木もさゝの舞もさゝるる 比誰
あゝ人のけうの今ゝ言自某 杉丈

いせ溝の深さ中ち黄れて 百采
ち所のもさゝゝ珠散を能る 李門

百采 何くもあてたをさふつく 万州

新もさうりも定てさうり 一橋
あゝのさうりもあゝさうりもあゝ 乃九

あゝ合井戸の傍へ過ぎ 白根
おのさうりもあゝの傍へあすら門 有良

あゝけしもあゝあゝあゝ 一由
おのさうりも木さうの幸もあゝあゝ 一扇

あゝあゝのさゝ紙も小念ひあゝ 麦林
あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 倉原

あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林
あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林

あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林
あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林

あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林
あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林

あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林
あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林

あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林
あゝあゝのさゝ紙もあゝあゝあゝ 茂林

号 伊丹屋、李白つまらば月寸松

言木をまきて足れいせい、素凡

世とちろくを控へ出る事、甚之

島系くはく長柄一、け、長水

世とる今乃山博の系、り下

かちが榎行机後、まろき、板壁

かひ、君修和、会稽の聳、キ角

耶那の尺十九子も猫の紋、素系

十七、せとき亭ちやく候、五云系、コ杖

乃姓の御、むのま、一の山、右風

唐云の花の、よのよあう、李夕

ま業、松系、小念、帯、ホの名、おも、誠、苦、う、ま

△系と、お、面、去、一、座、マ

ま系、紙、の、お、ま、身、ま、け、り、翁

お、ろ、人、ゆ、系、の、町、と、占、く、ユ、山

ふ、ろ、一、は、部、河、乃、斤、山、家、彦、仙

始、も、連、て、一、座、の、系、系、

の、係、係、き、お、松、枝、は、茨、う、て、不、角

宵、の、あ、ふ、む、系、の、口、ん、一、僕、石

△お、玉、名、面、去

瓶、表、の、聲、声、あ、き、標、と、身、を、促、て、翁

言、系、の、縁、一、白、田、作、て、桐、系

孫、系、の、明、の、風、雅、を、志、き、ん、て、角

夜、の、又、す、の、ね、意、を、お、や、り、て、ソ、ラ

一、梅、の、風、の、味、は、何、れ、人、の、圃、乃、月、翁

一、梅、の、風、の、ま、り、え、よ、る、素、の、山、く、

弁、二、去、の、係、係、乃、さ、る、あ、く、は、面、去、と、お、お、く

△云、字、あ、去、吉、お、去

舞、の、舞、年、い、何、の、玉、う、う、り、る、喬、谷

又、た、玉、の、下、領、を、あ、き、ん、

味、ま、あ、く、屋、務、る、玉、の、後、吟、山

必、を、ま、り、お、す、次、れ、翁

玉名

萱

萱草の玉名は玉名に似たり
玉名

一
次
下
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

△玉と玉名

白

白の玉名は玉名に似たり
玉名

拾

拾の玉名は玉名に似たり
玉名

白

白の玉名は玉名に似たり
玉名

市

市の玉名は玉名に似たり
玉名

山

山の玉名は玉名に似たり
玉名

△玉名は玉名に似たり

玉名は玉名に似たり
玉名

先づもより又異なる玉と名に似たり
多うれども玉名

冬

冬の玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

玉名は玉名に似たり
玉名

カイ印三

光記

你

你女よ女をうりの下登しき 西を
伏えのえを入おきき 曲水

浪

美まの舟いよんをね付 素枝
木を海にあれとや草の枝も 粉吹

和

碓氷の海本殿の 改方 奥事
朽木末合寺かききの葉を 小枝

後橋

後橋のつづく嘉防燈井 呼獲
子屏の柏木とやうして候 白鳥

穴

穴の母の乳乃力正山 許六
窟倉とえあうとるいさきうさき用とては度
もとけうけうけあふまうとて万化あれとも
号えうきあて只並むに拙き根あむ

□神祇二云 古八云 〇

神祇を系おとする所因の上り代を系一めて
殊の乃と誘ふ後あるを今の人さうらう
神宮の次に押動化と清く名居の信は鳩の屎

馬してそを備極と心なるに風絶たまき人
あしむるも御神を天地と括奉りて徳の情を怪
さむるおられは是て絶きい夏おの本情は

你

那智の山も美在りて 嵐
町中の名居もきんりて 石

誰

お月映くのいしすり家 才丸
祈するおの中を押し出

柳

さあお今とあうさあり てる
大木にええりも宮の小とよ 仲志

お

毎年の社に 以被 杉風
さんわりと名居居るむの中 子サ

石

梅てゆくのあふをわつてる 風
斤多木の末社の様を物り

カ修 神をうり出て尺生あり尺も出て神生ぬ
もあり神祇の返向りきあふ多あふあ

百味

氏神のむも盛る候 揚 支考
名り并を残てはる言 柳

神祇行司の例は多岐にても思ふ

△神字 面去 頁おま

糸の意も神も七尺許し 津所

神上戸の久しきの神 雲王

以巾きてとれも噴霧の神ん 辰東

赤板いところらふの神送 里風

俗名をあつむ神も不柄 物水

乃神の神のらん白湯を 一船

子を連て四乳葉の神 芝山

極白あくる神の苗完 香所

俗名きい結の神もとりや 小枝

お豆よめい老彦の神 八宗

△宮 面去

宮門いする路あり月のた 基角

神さい子む総一乃宮 宗幸

我に孝あれ弁天の宮 尺丸

むいなをやく苔の古宮 伊良

良彦

士

難

禿

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

神

分

夕

音

尺

松

己光

△糸おま 古八島二

糸の出来れいあられのそと 河松

おあつらふあちも中宿も初来 甚二

おあつらふあちのまのさうか

角りのり給う牛反糸 宇中

戯り渡らふあちの牛牛あふ 高橋

おまことも 甲乃大名 赤お

おまこともおまおきも兼碗内 白根

おあつらふあちの門もあくとら 柳こ

△神の尺を尺付の 多行有 柳船

おあつらふあちの材木 箱

世宿も園もたあるちのせと 基角

まか様大船いしをちりふ 佑所

いし出た 子手おま 更幸

死すも人の何いあるべき 去芳

神風や吹かされて思えぬ 翁

其傳 骨の借しては玉を中へ 有り
汗と名にあらぬ 涙もあらず 嵐雲

△非神お神祇不燭

占初午 玄徳時言し作
占初午 玄徳時言し作

寒

・多しりも 松守 除おの 松ね 床ト
あつゝゝ 雪つゝ 雪つゝ 雪つゝ 雪つゝ
引くゝゝ 引くゝゝ 引くゝゝ 引くゝゝ 引くゝゝ

秋

・年のおふ 足る 月や 空の 月
空也 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
るゝゝ 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

△神尺不燭 七乃多乃有

神秋お成を燭さ 古風の 豊美之 蒼門月
あまきるゝ 去燭を 去守 神尺 神尺 神尺 神尺
又今も 燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ
新し 白松守 神尺 神尺 神尺 神尺 神尺 神尺
燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ 燭るゝ

因王重臣の乃も 子布 子文 乃も 亦多改之
宮代 白神 仙文 一伴 乃も 乃も 乃も 乃も
以今之 式を 改し 改し 改し 改し 改し 改し
一理 百連 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も

一尺

正哉 結し 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も

素杖

形代 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も

天河

乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も
乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も 乃も

神ノコト

古

木高の悪ちをばと母之 屋二
芝のをおておとよお上人 伝奈
つらひあつておとねの家 陸秋
さん用のニツ事つておひすく 支考

天

大悪の柳を枯てちりしむ 嵐雷
むしづつめをそ麻すき事 素林

ツ

尼ちの秋食の二竹のおよ事 東御

孫日の天神もくもも園 琴尾

長

高すくも あれい 懸り雪
持仏もお森いむのおり 雲鳥

神

△神云常誠不嫌

種 名店乃くも 松乃入口 工止

蓬

又 笠者乃衣の彼つりあむ 桐奈
ム 杖の鳥乃人さむく 翁

言向のちりい 象をり 文孝

松

町傳の挨拶あて大工焼寸 尾傳
死とあつてちの岩を 三翁

葉川

死さ庵の所云文よま 松 匠者
為の目くき時乃あゆの 牧童
海王の舟渡の舟舟と版をそ 林張

柳

ハ 大木へ又えも宮のむくく 仲志
又アの宿を思ふぬあく 高
ハ 聖天のあつて喚する候の月 甚二

□ 吳毎来云云 カトと東向

死て乃のあき玉あるく 旅人
白き夜の又中を雲昇 翁

死をさくくちの五洞 一
養子おりし杖は来くく 崩浮

世をお白のむく 蒼耳
柳て来る葉もれ少くて 凍ト

さくけも草のくく玉柳 松枝
神柳とあつて表の穴の尻 文廻

神道の宮よきれぬ袖の面 柳柳
又雪と天もささやうの家 言黄

難

早

了

拾

杖

カイ印三

六八

母をよめられて月のおきいー 雲芝

先度の風子人死あり 支考

あしく消る幽霊のきぬ 信風

子と教子 夢のあの子 秋 方丸

田の平と浮所と石の塚 風

誰か人の 志すやうむ 丸

懐の奥よりうらぬ世ありと

△同件 雲第 西去

葎 杖の為乃 人さひとせく 子羽

死人 子挿 多くきえうの志

何おむきや子甲の下乃 葎

去のの早乃 骨の白さき こそム

去のの早乃 大座の白 幕 柵り

柵 杖月まごー 羨望の桑 柵先

草州 手まのめ乃 ありん 志すやう

老死 人てあつとちて死すやう

何の志す 幽霊に來る 嵐七

あつとちて死すやうの杖 志す

△雲第 二万統 冬居前

世を去る一を捨て 控あり 悲しく 悔のちる 柵を

大乃 去乃 け 仕立ち 抱かれ けいさ 信

次句 灯をくく 幽霊を世に 送り キ角

古きうらぐ 雙引く 付 子羽

浮世の志すを 宴の尺 納 子

傍より 志の 木槿の ちる 枝 文と

何とちる 乃に 西念の 衣 志す 子羽

み

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

一橋

宗

は

葎

死人

印

幾

柵

葎

草州

老死

書

書

山伏は皮ひ成て来てれぬる 苔ソ
一りりりもあをとも 孫 玄席

先祖のたじく改を入て見る 白風
先くともやあまのちまきききき 大圭

又おのちの古仏くりりり 似去
おのちのちやうぬ末ちの杖

一層 根やまの衣よちのぬき子 翁
傍正谷 尸 傍正 谷 去

地杖 杖や芝君杖や 翁
一層 小柄ぬきぬの枝の枝の枝の枝

天 減令の光物 終終 佐徳
一層 天目 天目 天目 天目 天目

一七 珠おきぬの枝の枝の枝の枝 珠舎
一層 珠おきぬの枝の枝の枝の枝 珠舎

未束 一通ひくんのむの喉ちりりて 為雪
口ぬりりりさかやち茶 キ角

三 月夜つらる ちくのりりり 玉白
ちの小傍のちのちのちのちのち

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

三 山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

山ちのちんち月お茶之 鳥水
山ちのちんち月お茶之 鳥水

小文

△古青洲をりねま

石甲あれいきゆちのうら

音位ありーちのいさくし

一ねる宿いさふちあれや

厚や三井のまちのたぬり

山をうよるいさぬふ令号

ねんしの秋ーちの匠後

△仏井教をりねま

花のほ生のの ちの教者

角力仲るーちの自己仏

次やま ねまきりも我力

何井むい白きを後よす

忠根ふーちの地産を為す

子声 ねる 教者のい名

△仏字 面去

毎日の清もすえて仏在世

先大仏 ねる 清く

古青洲ねま

尺端

病

意

准

準

本

小文

方

佛
刊

星合

推

二

香

漢

ねる 星合を仏乃も尺端

念佛のねへちまのい

石仏のりまぬあうり

仏のいまの花を ちの

△佛 尼 講 面 去

乃へりあてて佛重の月

系村ま森はねるちの佛

一の山は信佛のちの

真の 禁乃 佛止る 谷

そや 佛のセうきさむ声

子あき 佛のちのいささや

尼ちのむさけりちのい

神ま子尼入乃も田川

佛清ちのいささの秋

そやの内まのいさ清押あ

△釈 雲 帯 残 不 燼

古今の變化はるる清き人更のねまを仏乃

其の常といふは仏の常位不変なる所
 其中にて他世は世常といふは死に去るる
 變をとりその人鬼乃ち相おれ世出世ある
 釈と説く種なき理なるをかれと釈氏も
 無常を及くありておと惑ひて又佛の草木
 云云常等の教をとりて淺き化をすれば仏の
 乃よくとて釈の教におと種なき云云の中
 種をおくむも佛の教は花を日月を
 送るおもありて常云怪智も人を惑はすおよ
 もありける法界の理を要する捷徑の學
 ありて他は入却てお理は勝くある人ありて
 衆の教を宣おれぬと種なきを云とて此の理を
 卒覺學の世常は是れ釈の常を云とて
 是なる物とて種なき水も花も木も沙も
 云云も灯もはては成せおめむやそとを云
 ぬ掬も世に許さありて常云とておそとを云

亦ありての例を尺二教念をあれむ

若 ぬい 附れていふを殊す松 ソ 英

拾 附る 日石の井持る天をとめ 信 風

種 懸ある 雲は法花と心 信 風

塔 九粒 いちて青名の塔 ソ 水

尸 く の松新くちとあり 信 水

尸 む ころをくを殊す夕月 信 水

尸 持 一尸のささり 信 水

白痴 行 するそ天乃昔法 信 水

傍 賢 ありの伸は清つをさく 信 水

尸 小 子よもりの煙草のち 信 水

一橋 布 子さきと布子よるおの果 信 水

仏 種 ありとて寸葉葉の釈也 信 水

塔 五 葉の塔はちとく 信 水

草 鶯 合の尾を懐のおよ 信 水

死 風 ありとておくく 信 水

鬼 鬼 ありとておくく 信 水

他

るに肥るる冬の子ワレび 身香
あししまり舟のしるも 友に

音

川のみんはるる田を植て 高ふ
海文子時色と月を秋の色 柳に

耐

中の杜よるる寸夕立 僧白
秋乃るると定ぬ空 自矢

一

血乃れ恨毎日の去乃る 似去
時色の松乃汁をさす 子菊

△

△石河川 去

壬

秋風のる木ろくと川の上 土芳
哀よぬくしるの白砂子 栗芝

△時おれ去

松白

又之れの家よ目のる村時色 蝮子
初時色去する松を傳來て 子梅

自白

又之りや時色て雪は一昔 小枝
高白く時色て時て茶葉砂 匠若

雑

村時色十秋の内を葉りり 溪石

後橋

都する北の康隆の春時色 木乃
ふの芝居の春を時色く 木因

西原と考てに口ら秋いろれ 支考
△時おれ去 七及多者 〇

冬園

春を後後狭く冬の春をめて あ伝
冬くおりの夕考の春 也風

印

力も枯し去の秋州 享子
は青行舟は考の今さして

表

ぬる空を去て教官とき 空玉
去の考は好ははへ時よりり 仙芝

浪

唐あろの中て又てあをる考 波産
入連とくふる乃乙考 可夕

張名

灯火をき稻稼乃る 寺角
ちかくと冥陰む珍考 考若

草洲

あつてうとてあろの考を 長徳
月影を考い表考の傳乃 牧考

コモ
ツユ
ヨ

春を足あておぼるす月
白身や足あておぼるす月
るはあせのふを失くす

ヤウ
ヨ

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

カ

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

小文
ヲ

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

飛虎
ヲ

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

冬

初冬のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

春

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

次

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

秋

春のあつたひくきつる
春のせとよこめなるはく
△降おぼるは春を足あておぼるす月

△ 舌路 面去 カ山三百五十五

柿ノ葉のときり 舌路 菓

柿ノ葉の相乃 舌路 菓

仁といわれて 舌路 白舌 菓

わらわと 舌路 柏の舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 曹同宗の夕 菓

細ノ葉の 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

舌路 舌路 菓

△ 舌路 面去 李ガリモ

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

支ノ葉の 舌路 菓

去

去れぬ林の在不自らあり 許舟
去れぬ松の影の似て暮れ小景極 吾仙
初雪の伴竹の山又ちんくく 元明
去れぬちんくくちんくくすの去 老
町中へ流るる川の去あり 明

△ 市 西去

市とありとくくくく便船 古乃
引船可市とくくく持あり 季王

△ 去 市 秋不燼

去れぬのくく去の山く 誠人
又けくくくくくくく月さき 力号

君の去れくくくくくくく 相豆

△ 浪 去 二去 カニ 五 多 何 者

古云くくくく風件も三去あれも百も多用
ありあり二去件あり又去るく風件のはあり

肩て風さるる後の出代 り由
二風老樹のくく乃名立 許云

浪

申

み

考

野

野

野

野

野

野

野

亡れなくくくくくく 木鬼 西村

林もくくくくくくく 外丸

角立てくくくくくくく 葉少

風のくくくくくくく 涼ト

くくくくくくくくく 風文

胡風のあしし 未きりく 虹棧

あししくくくくくくく 貝虫

浴衣の粘乃くくく 枯枝

△ 風 同 洲 三 去

風止てあしし 修の 反舟 正秀

杖風くくくくくくく 鬼苓

袖ひくくくくくくく 悠水

去風くくくくくくく 嵐之

去くくくくくくく 口眩

風くくくくくくく 江余

風あきくくくくく ちり

り拂之りくくく 千川

去云

舟に出て西くなき方の風 秋陰

長長

月と風よの境に新く人 彦彦

水仙

風を相子に情も一さし 仲志

梅下

あはれの吹くささ風林風 杏色

笠

さくさく吹きぬ風の吹てり 月夜

已免

わらわおきぬ風ひく 彦彦

カ仙五

さゆりさきけの風もろく 彦彦

月がれて石を根まき風 彦彦

風冷初年のま乃 彦彦

△嵐

おと席を海すく

あ

初風初夏の窓の坊主も 水

萩松

林の嵐 昔侍より 力弓

去云

嵐の口ときのおんす 朴人

山

角ちりくち中下山 彦彦

△去風 秋風おま

今可あそ 林風松風日寄

一松

いよほおんぬるる松の風 彦彦

みの

去風の他に徒を極玉寸 彦彦

只西去そく 去風あり 彦彦

△風は吹き越不燼

香園の廊下で紙燈吹消て ヤハ

キ 山のあらしの海き旗の音 盛水

おぼろの小袖を吹消る林の風 ハ

こぼすぬ尾の夕風吹入て 竹松

七 今もよきあき青表紙あけ 一橋

風をひく踏何者人もはる 舟竹

岸を捲る風の一吹 一楓

みの 陰妻も日列乃明やき 以水

岸をひく踏何者人もはる 志水

おぼろの夕風吹消る 赤麦

白扇 ちりちり木こゝの音 赤星

△風は降筆紙不燼 何器

風の音も南より 木上門 三羽

柔 小舟の帆をほく夕立 柳風

おもろく棒の音は 木端

キ

海氷の音も 扇

借書 門のたいんきり 占木

時の音も 三葉

茶 ちんちんの音も 白鳥

おぼろの音も 柘榴

底 人透く音も 瓦鏡

みくむの音も 信化

洗書 金屏をよめる音も 呂風

櫃をひる音も 木角

板中 羊さし音も 扇

ちりちりと異音も 扇

板中紙の傷をよめるは 杖士の音と 杖一次の下と
長白を並ぶるを古字かより ばて 髪補一

恨 思障の音も 林屋

今もあき人も 支考

面白く音も 相之

信 去風の吹く園いき住る時 秋故
ひう人のむのむらさきうき 秋函
明きると霞よりなる 松雲山 松字

△ 後集 二去 夏今日
白子のち又我きりの法 工山
笠持て居るやセ男 三羽

去 山多心月一時ふら立て る相
くわりの仲の忘るくく 手

你 所株や水田の上 林のき 西を
あえ州 燭のきりく 小三

更澄 雲のまれてくくく 打たる 松所
冬に雪井のきりのく 始成

お 己らうう 野の残る夕月 杉風
栗山の五雲より来る 陰枝

山 落きく ぼる山のくきく 小枝
ひんよととせしきききき 松枝

△ 雲 三去 夏今日

古松 浮雲の消てあきき 松松 風
探函く 崖のまき 秋の月 三羽

小文 けきこれの山のも 落きく 書信
いんく 雲の井つく 横き 山竹

耐 樗の花より 雲のきれ 周以
あろくく 雲のつられて 月を 夏雲

コハ 先月くく 雲のきり 許云
木やり 雲の采り 挑る花のき 松

百 去のありと やるのき 夕赤
日のくくく 雲のき 養生
月く 又あき 雲のき 市

△ 雲 三去 夏今日

葎 傍のぬく 雲のき 為枯
おきき 雲のき 小松

皮 桃の日に ぬく 雲のき 口松
木路のき 雲のき 山中 涼ト

与

門前の持衣に好む月を見て 翁

向

山も花もむとまいつくし 知是

一橋の
品

さや終子花の衣の袖をえて 三羽

古性も横点さしくおをぬ 信孝

へ

きりり蝶の 声さ帰る 示右

きりりそいやささしめぬま

△桐栞より降筆紙不嫌

奈老

他つも栗の鉢とく神松 桐葉

独りけりるぬゆめ 松 工山

為る定の天を降るひて 奈老

有実

里坊の桐栞川に立えあれ 修枝

つきまをこころる栞のぬお 貝妻

一橋

小風うらやま出る雲の雲 巴原

口は陽をの美をちうあき 信風

筆をふるる笑のこを教出て 一目明

浪

二粒之粒と草をころり 一

林下の雪より山のこりり 祐子

り去のむと降世に勝れて 海老

人も陽をさるも陽をさ 草

貞隆

△從筆抄付の元書

小文

而の利なき 雨のあささ 何菱

林下より花を以て冬より秋の雪 十丈

わんわん澄うさたのむき象 比佐

又とちくくと神ゆらあゝ 嵐舟

風印のまらるるを月のかけ 書浩

古文より同件おのけりし一橋の栞ありまゝに筆をこ

りてけりあささるる筆をたてて花をこゝに仮令句の

筆をこゝに筆をたてて花をこゝに仮令句の

七カノテノレ

△室は天人。陸は照敷不嫌

夕 葉臥て寝やむる空のそら 痛乃

リ 十は栞本うつくね杉 以重

そ 二楽のちも空をて花は天少女 身御

レ けり子鳴て高をれけり 陸写

人 青山風の蒼き海原 牧舎

り 裸もあられぬ旅の照行 和珠

△室・新 五去 古八面云

たす寸ととて大工の上の志 栞石

志い新いあくる白く也 一

夏仙 陰もせぬ志いくそそ望のき 如昼

一本并もりぬそく 佐 五春

林の色とて空くぬ 志 自笑

志いんも所まの志のきり 一

室の志いも志の地ととく 僧川

若おのぬれくる声の志の志 その

栞 林もも栞くの志の志 支考

さく終り防ぎの空のきり 子世

志いんも志いぬれぬ遠 佐里

一席一ツの命 志い 粒

日のけのあそく杉の栞く 陸皮

影の新ゆき掃ちきり 後若

日くけの志いん 志い 一原

月くけも吹ちる川の夕風 如空

△照晴 五去 古八面云

夜 照星は影面とくる句は七八もあそく

ヤ 志いんも志いぬれぬ遠 佐里

か 一人今も志いぬれぬ遠 佐里

月まてる志いぬれぬ遠 佐里

聖具も月夜の志いぬれぬ遠 佐里

志いぬれぬ遠 佐里

母んも志いぬれぬ遠 佐里

たぐさ子伏足竹田の志いぬれぬ遠 佐里

カイ印三

三

●同時分

花枝

紙衣もむくアあううう月夜て
机控て人よ又もくる夕暮れ

三日

夕アの虫 今も名出守
去の鳥もさうの夕ぐれ

茶州

名月。花下の橋の芳うけて
芳云をうつくと吾井の門さして

白扇

舞入いとあつたたく目の方
扇の行ふ善後の風の芳うり

梅

あまの芳も夜もゆめゆめ
夕暮と冊子よすむ窓の月

秋白

月夜も園も静かあ
おゆくとくくい高の障子あ

吉

おくく月よをそと牛糸
よむわもわねす小お衣

梅十

まのよのゆれいぢの灯を
月よとも園もまねぬ雨き

下をよらひるあうもぞん様
呂杯

せり川

所の声は中人あうあうさ
あろそ山よの程も寸草の雲

良

身もあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

附

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

花

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

花

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

あまのあまはなれぬのあま
あまのあまはなれぬのあま

カイ印三

良六

其節 山崎のさきくへ 花といまやとほきくし

元夕 夕に霞はるるをあるまりのる 霞店

壬 残る枝うけききるる 杉を

ヨ夕 陣番あうくくするの海あり 霧

夕月の光る枝の實と守て 去芳

及 三三川上を船の船つけり 月由

左 赤雲の影を指し出てる 反村

天目も青の影もあつてあり 涼ト

せきこ よまの石とこゝろで合する 欠吾

方め 橋人を又まする月の明後 一才

化 船くく口もあききよの来て 柳

も方お ありおきくの吹てとくこ 落丁

夕 せんくくの唯とまうく雲の月 支考

夕の枝の隣に 徳や大徳や 西青

夜をききも 矢とくひても 夜由

ヨお 種念の後のゆく 影の月 山り

お 種念とくぬ 八杉の影 陰枝

お 林の水ぎらう給を引して 杉風

お 湖上行彼残る影の月 仲志

お 舟りつらぬ風の自由さ り志

お 信人のたきくあうく林の音 柳響

お 長をえいあれとくお人色 伯祖

お 舟の影のたききわを繋ぐ 甚二

お 自分六書て青文お園遊き 望月く赤く

お 火徳の火はて掃きと掃きも てる

お 修りからむの遠くおをささ 一

お 月の影は徳もお徳も下たを 可夕

お 今をのさきく今たの 意 落後

お 青の互を殺のあう 娘 板 糸細

お 夢ゆてたをたをたをたを 月 板

お 句 辰 残 荒

お 辰 句

お 句

お 句

お 句

△秋仲哉不睡

本堂蟲砧の秋の初めんあそびを白うすされも秋
分は秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

秋

秋の初めんあそびを白うすされも秋
秋の初めんあそびを白うすされも秋

△空回書 五十一

三日

白木槿のきんやしく 林角

及

うきんをききす 林角

休

休日 多も 碓氷 ときうて

申

休日 多も 碓氷 ときうて

申

休日 多も 碓氷 ときうて

申

休日 多も 碓氷 ときうて

申

休日 多も 碓氷 ときうて

申

休日 多も 碓氷 ときうて

申

休日 多も 碓氷 ときうて

八節林

林角のいづくかきあく時を 山店

橋山

命もさる年の年とゆき 枝角

正月

お千すめをききあはれ 市仲

正月

ひんまはすのむの吹うり 十丈

正月

細も正月 梓も正月 市陰

正月

お千すめをききあはれ 自然

正月

お千すめをききあはれ 自然

正月

お千すめをききあはれ 自然

正月

お千すめをききあはれ 自然

正月

お千すめをききあはれ 自然

衣 去の拍子の 山影く 暮竹
陰ぼしきも 去き竹あし 支考

本形 雑形の北にまんよ反付て 左記
五大木の櫛々 至茂 隊幸

冨 怨谷の陰印くる 杖のあ 盛水
手あ志の一人もこえぬ 圃の杖 ヤハ

松塗 村白の杖のおとく山 下凡 柳士
下地意より 杖を取て

枯 水うねんとして 反あさあし 嵐毛
陰うさあし 吹もるさる月 車紙

去集 去字三とさる老八あり 其余何多し
ふくくくくくくくく 杖のさ 更心

存 吹くくく 杖のおん 伝化
陰集うさる 今この 杖

白 去集うさる 今この 杖
きくくくくくく 今この 杖の坊 考

白
林云

余程物くる 後 去の杖尻 字後
杖あねや 紙の白根を 必のむ 化

△去衣秋を字さ南の 白

去杖の字を用る 中子柄おく 在世字言こ 困て
去何杖何く 用る白あり 中も反もと入
くくくく 杖のさるさるさるさる 一も何さる

徒光 其色を先居れ 作さ又 三反
る杖のさの 入用い 去仕入く 是杖を 一 却付
又 須いあさう おうさるぬん さま 可水 ぬくさき

公 去くあさの 白く 去ト 用て 其字を 含むる
りけ 杖ト 去さうりも 去ト 去ト 去ト 杖乃
余情を 含て 却て 傷めり けささ 去用る 杖よ

新に出るも 去くさるさる 面白

白 去の 杖 女 の さる 反の 月 反村

是白 居衣の 余情を 去さる 去さる 又 涼く 去り
ゆ 何く 山 白く 去の 不さ 去字 去くさる

子てきめりるるあはれ

△五冬四季二去 一と二去 古八五去

△五冬四季二去 一と二去 古八五去
これ等の指合よまの宮とあるは多しはた
今の他所の書林の傍の書さるるも及冬は
さるる又日暮林の書傍の書さるるも及冬は
さるるつゝたさるるさるるたは

△海老の書も口振りしりさるる 頼深川句書
△五冬四季の傍あり 車花 樹山 伏い 支那の書か
るるさるるも二去の傍ありさるる 一と二去
一と二去と定らして又二去は許さるる中 涼
十文字の書も傍ありさるるさるる

作
十冬のはり 樹山の 為さるる 箱
口書し 頼るる 声を 着るる 無事
せし 又入する くらやの 約や
移つむ 岸の 書さるる 明りさるる 許さるる

東七

ひさ

射

橋山

コハ

金砂

△他季カ他二五の傍

他季の中用らるるさるるの傍ありて定めらるる
さるる二五さるるもわらるる高きありありたカ他二五
を合て七八の傍ありさるるさるるを合て

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

さるる 枝子 支那

出ずれと破は是一人あり曰妻の白き何の物ぞや

鼻の先あされ火袖持て来り

と秋戻てあすい 云く 支慙

れ飾 面白くくしてあつうふり

おのひ布とくう 山う

おのりくも菜畑の 表 亦及

おく 厚む 寝の板の木 三船

日當の輝く 吸筒 控さす 仲子

旅寝や ちき五月の舟伯

町もすもも 竹長 約りけて 霜

おを初冬のま中 世事あり 其あもあ

△長秋の季をいふる

立 ちのりからむの 静くりり 理径

ひき 空のなき声そ 鳴き 二個

△初冬の静き 暮宿 居る 弘石

静くりは 余も若るる 心止の 伴と 又立て

初冬の暮をけりて 立て 長秋の 季をいふ

月夜をいふ 他季あはく 出守 号のあ

時々のあありて 其季あつて 叶ぬ 静なり

あし用は 娘も 出さ 妻の 皆あつて 其秋よ

り 静くも いかぬ あつて 始り 出さる 季あつて

またよ 不用さる 心止の 伴と 又立て

△素妻カ仙ニ 百句ニ

白揺しの 素妻の 体そ 中よ 出守の 或は 秋登

くのり 静。 他季の 心止の 出さる 時々の 或は 花

表よ 出さる 付く 又何の あつて 其季の 入用ある

付く 表も 静も 後の 表も 出さる 何せよ

も 素と 夫と 出さる 時々の 心止の 素妻あり

時の中よ 出さる 心止の 二ふり 但心止の 素妻

出さる 時々の 素妻あり 心止の 素妻あり

五人 うちありて 素妻あり 柳が ヤハ

口より 心止の 素妻あり

・手取り

続き

横川の月をカよ山あきて

そちつとくけ。雑の勢やハ

あつと成てもゆぬおの意

あうまの字を捨入得たキ角

仲のその白く樹根をひく百り

其節 玉造は花をさむ古郡 嵐岩

候の力も也守 於花 角

をほのまの風をさるまの月

白のそちをさすく。勢のあふ 角

新 柳のさうりのはての 用 又と

二月のま葉はすまあや 二枚

十七回 柳のさうりの候の 用 似去

三三回 柳のさうりの候の 用 千り

△季移

季移の両季極まうつと字守只月と心

花とよ白のゆきも移り涼なる林こをる寒

を林をさすあり。庭袋加に季用りあふ自在に

戸彼を代木のま枝はほわわの移り

まうまねる候ニキ移りか何は我不わあふニ季

移りか何ニ不る句ニ不之に十極る傷り

もあう守句移りニキまもニキノつも凡

乃の候已上移り或は及林去林去及

林去林去林去月むと候るあはる及

冬一方あふ候。又及去冬冬林去

月をた之中してあはる他キと候るもあ

又去る林林去去去林の中他キ一句今

時あはる候は候れり候とあはる候は候

用り中の他キニと候る候は候は候

月もむらあふ。又林去去去及去を候て三季

移する中あまの月むの風候の眼あはる

土あつと山やう浦を夕涼 三拍

柳ねるりそとるむ芭帆 不玉

あつ。○月出の岡をさくむは持てソウ

表 ア 赤りの葉のけつ。林風 翁

一 中して極よきくさるる色相 玉

一 あつれのまをさくふら毛 王

、冬を渡る鶉のあつ冬を 翁

き日深川もあつより之千流あり

枯 + 清月アしやアの友お カソ

ア林の枝乃もしく出アツ下 横ル

去及林を字に目立て梅さく一六六月

こもる雅教をたふ友おといふたをけり

奇 フまももやまあくとまをり 東お

ハ 匠者の江乃もも云月 白お

りもはたのし梅さく

△友を抄

フまをりよき匠者畑村 翁

全、みまをりよき人さくく 匠人

たまの思をさくむ犬の森返て 聖人

ア フ 赤まは赤をのどろきさくせら 祝王

+ 是うの使すの約籠すし 牛原

のこりもさく 翁のりもあり

尾 フ 赤の赤のおの結よさくね 巴丈

+ ささる十戸いちこの指よかまらり 乃川

赤葉 ナ 赤のまつりの山に村の白 支考

フ 布子よりり白河の雲残て 秀川

しらこい比お布まらりん度こ

ス ナ いまけあきほふのぞくかきんまを 益を

フ ぞんくまんの万白は教さす 何れ

かきんら尺キ候あり結よしけあきほふの茶

とまむようもまの銘文とすも方ま指こはまを

ゆるけりる木さくさあより大さ出さとも可こ

△他キ一白校

白足 秋をて藤のテおま多却 キ角

。年の候をたく夕月 秋

7 遊きをおく脛搦の白
 △松ん不化は但するむ乃此
 二中夜うすむ 入お
 ハ夕 △むよさくひんのうひちうさ
 ちあうん桂に五中 昌栢
 蚕飼する世よる去う極るそ 和竹
 瓜実煮の香る所おく 子也
 卜初帯乃後乃の香を浮くそ 何生
 重徳危の終を使寸出代 ウ中
 人の口は戸いひてある杖の尻 寸昭
 ○ 度心ま更し月一斤破 乃考
 着徳もあむ西行と野はそ 甚二
 白眉 ○ 灯の光も房さ月の照
 吸おさくも松さ丹のうさ 休ぬ
 丁あまつるふの杖を思ふこ 夕栢
 小使う出てそきさうさあ 初麦
 △花もすこ首るさひふこのま 車室

甚 〆雪の日に内を雪の博をそで 甚又
 ハ 琴が響ある梅乃落さ 甚豆
 〆 朝露生とれくもお思 一栢
 〆 衣忌久くひいつるきき色 散人
 十 竹を初考るるよ化枯して 翁
 ○ 万極の月よ車 忍もそ 炊玉
 〆 けりい極する考のさうくと 巳百
 〆 孝子みらむむをおおそり 用呂
 要栗 二十一ア五二八三にキ土統ア
 十 桑くまむの雷はお竹 唐風
 〆 友やせよ負人の容を養て ソラ
 〆 玉あふる目いお云ぬく 妻英
 ○ 入る月や申るの方果もあ 風
 〆 丁を放て破る州の戸 翁

カイ印三
 五八

丁あぢのそとさくむちて 英
 去年の相子年暮れを出す う
 植わて去る子まを傍めむ 翁
 大串あるへよふのなをきく 凡
 ぬる花き連房一両句 う

△南季扱する

園月むのむも限すは季のけのよ夏まを棄
 するすの二三句燈き時の南季を捨て極向う
 扱す一極の極子翁と極を定て門の花とお
 ちひせ刀と極向を定て橋の月とありよ秀の
 二三句をさ時らむ夏南季より扱て花雪月
 秀の扱は二句の風情をそ守へ一け二句乃
 扱方いえより変化のおあるをさあへ一
 今此季はよるを欠く物にあふ今春は友割の
 末れもと床と空のむせをうけおくれ空
 海で空入林は水は唐そりていあへく

揃ふ家あつ汲をきくよ去る九月は極
 改とありし現を妹とひきと手袋をよせ
 る句の中のもよん花田を捨てをの歌を
 手柄教まきひ帷子の近より夏大折を断る并
 及ふ陰字をよる索極極干も季を連て
 及とくいう栗坊ま夏男も秋またあくとや
 月毛約月家或は月の元天窓かろあめ河
 をよ出り秋家宮を昔よ系が系紙も婢
 もあう桔梗の扱もはるもか一を捨て
 屏の書子を扱む熱一産の仇世を入るも
 季のり文はか又作急をよむむ徒ありて
 実ふ山陰の山を扱花示の上下の字を二ふ
 分用て是を別季を言下四言あり却て其
 山の雅とあり其花のまとあるをえ守或い
 極と極嵐とあはしのまをよ飯久連を辨へ
 さるいふある人の邪をよあれいへをわ

又さる所ありしと定まらば人の世々かく

△春 他きを常き汲る所

他 又知る方知事の所出て 沾草

ひき 協協の毛束うつらきく出て 口通

炭 新畑のまきもたつくまのよ 口唇

枯 枯し柳を今こきりて 盛水

残花 冬よりいおうま 池の魚 沾木

枯 手残すま 板の掃換 力り

畜 株にあすい 衣文 支考

小弓 朝まのひまをきて 家々 如り

百騎 残衣と膝をくく 袴門 風竹

梅十 ひろねす 裾と大樽の持 壺平

△同 季を活する所

冬 又や乃日を来も 叩く 翁

夏 月のをとけの比は 西川のそとあり

箱 包所やう 師匠の云方 舟

トリ合 けあひは 後き 雲霧の声 後儿

七き 夢 夢を 梅とあく ちのる 一才

ヒナ コヒナ 象 梅のら 猫も 鳴いて 二羽

白兎 隣りの男猫 はまの 妻 キ角

仏 又ちくむも ちいどん 出所

種 移進も 同價の ちあれや 千梅

白虎 ちこのち 一節 馬と 初初 許云

赤山 白路のま 鹿と ちうてうの 川 葉邑

陽 陽の 陽中や 陽あむ 陽う 及 精いり

山夕 採る 旭の 山む ころく 六之

白鳥 ころあひ しま 何やう なる 天垂

十七 飯は 居る 芳男を 又 きて 承兒

その 手 枕の 秋 西の 娘の 翁 巻 借 位里

赤和 鳴 井も 春を さん せう しく 琴尾

ぬひの 他は 四季の 中を さま さいお くの ぬも

あり 又 梅は 並る 能 守る も あり 是 来 あり

只今今有対馬よ又かく作て有持する
付の雑るありし

△雑のおを季に汲る所

申 雑の信ある季を括せしり 乙由
柳原号の所書るものなるのふあれて
季に連るも括して打残も将寸持れ生れ
持れはもあし 仍令風の柳原ト作ても 雑
くさりと季を括せしりト作るは一信の信
さうあうは信を括て四季の所書るを括と
しりあうと再すもあうれニ止の曲
雑 一主信信と強く釈又連 山り
及處の仙家の事あれ 雑勿徒之 又季之文の方
の徳集の中は外ニ又季寸ニ括せある
は曲書に用ひし法家の季書ニ及處ヲ
しり古式信書の様し

△及 他キを季ニ括る所

ヒナ まいこし度もの葉葉三度括 拙子

お 乙名の三もんよと季に連る 拙子

及 雑ありあとのまのちもえ 許六

△同 季を括る所

む括 風カ あうとや書をくす寸風の書 三和

百鳥 夏秋 ハツとセツと 老ろく老のめ 乙南

サレ アノ由 括のまのひの力あき 風 吹石

名催 イサキ 神もゆびの手の目うら 枝夏

多夜 アノ下リ 月妙るおろの犬丹打降く イ括

信 アノ下リ 本書をくすことあけい山ち 夏辰

あ アノ下リ 上るあろく作の奈 俵 子サレ

、 アノ下リ くらとけくろ斤掃の麦 花舟

新 アノ下リ 屏作る括の度をもあ合 キ凡

三匹 水多シ 水におし節のきれんさ 葉小

箱 アノ下リ ちあうと思ふぬくむ地の草 仙徳

八巻 西行と水 結くとむすく風原乃あ 再杖

△秋 他を菊キニ遊る所

杜白 燈の玉丸の箱つ付口あきて 菊
 子 ひとりのおのちえ揚上声
 猪花 大板の育ぬまふくれて
 舞 炭室をてねてまの 梅 杉丸
 キツ なるそてくく 檜 子りく
 拾 冷初めおろし人よえり 雪丸
 与ら 切やつるせもやめては比 故に
 葉州 雪方の雪子の日も 樹ある 隠者
 白鳥 口抑をまの 茶の角の煮く 元士
 艾燈 葉の二えんは種をそるく 支考
 山中 せりもあふぬも 皆 檜木く 里白
 △同 季を落しる所
 翠香 許されて廿中の中の方及に 菊
 猪花 伊子 真の世をそんを子の作
 花 子 年よ一斗の地子斗く 去来
 白 定つてくくる年のお成 嵐を

冬ソラ 葉を又てくくくもあふりん 許六
 白見 網もある衣ひうろ 樵の音 彫業
 猪花 すり木を粘強うも 出あす 二岸
 白毛 何白玉の音志さうく 可及
 あり 三三 菊の音所は 信世ういかし や水
 十七 物敷友て 秘考く かの川余 孤松
 名は色 もまやつく 何がとめても
 一カ うんくする上毛の雪も 喜舟より 柿屋
 了り 五之と引いてきりもろろ 什司
 歌 平沙よまふも 色は 大町
 及 乃さあつきのねひええる 園友
 赤山 笛の音のたう 風の音は 大川
 白鳥 又揚つて 頬へらの 砂 小松
 拾 猪花 枝の解のちを けあうむ 友五
 友 所へりく 菊を 抱る 橋下

て後人の定を仰ぐべき一層の約あり

○百白氏カ仙の建儀の式は数におもねる病の者
法は信て善杖の去るべきを流るるを
二去りて一より三を流るる勿後

○總かりのシノ尾の形製をねる善杖の才を流
ふをねる限月もその形をねる上りも
二と定むる善杖の去るべきを流るる

二月のカ仙總かりの形製あるべき何れも
形法をちりて考ふるべき善杖の流るるを
形のその寸陰するべき善杖の去るべきをねる

は形を善杖の同形をねるべきをねる上りも
ふれい形もねるべき善杖の去るべきをねる
ねる善杖の去るべきをねる上りも

二形も善杖の去るべきをねる上りも
用るべき善杖の去るべきをねる上りも
二用むるべき善杖の去るべきをねる上りも

月との善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも

其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも

其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも

其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも

其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも

其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも
其乃い善杖の去るべきをねる上りも

務の者法に之を季言不自立ある修し用て之
去の略式に之を依不能諒より用さる付は後
法を破る衆を其祖にゆきしを起して改革せよ

△總力行表に就

谷水の窓にせうけて花後 月鳥

後うつけよ ねく 児連 月鳥

孫たよむくの馳きの草屋 月鳥

風の拍子に博も一さし 仲志

箱の力仙はキ九八出さるあれ無力は十六八ある等
まろく傍て勢古をよる季も多し弟おも歎よ
出さる生後白依は自立をゆる付きし又
季のたよるたすしし月花とく好は先を
おろの又まよらうらて各重考くさむむ
たろめけめりさよきれていさる

□雅

夏三 和身の集し雅とて数あり雅伴といふも

あて連証も其名を傳り今も他所を評
する所は雅の不白い節の用うては季の部あり
曲言といふも今拙すよ名あり雅の不白とい
ふも又その名をとり又風情を極し松又菊キ
を結むむとする時必思ふべき

名は定所あり付定ふ神祇祝賀哀節をた
本懐誠お志様名はホの白い季の格おきおの
とよさるるせむとあくとおあくとあくとあくと

全法 夏三キの句といふ二ツあり一ツは表は表は
季といふことあり一ツは表は表は表は表は
といふも一白は季といふるあり後表の白は
去来は雅二件ありといふを古今抄より今一併
して雅雅体と格と二層は名を分り
是本虫の弟より後まよるもの

△雅 表は表は表は表は

名不 新おきを能ねあそりん 雅

名不 携るや又殊のちををるる 支考
 衣 衣をうて身は衣の款より 去来
 き 衣は衣の事よぬれてあふあふ
 名や 祥よりき名のらんや衣の山 考
 寄 信よまん年よりし系年
 蛭 文と衣後を衣の衣乃く 秋信
 衣 寄あふの白の携持を杖突扱を信
 信 信よあふまをの白の信 信
 信 信よあふまをの白の信 信
 信 信よあふまをの白の信 信

△ 雑件 季ありてきの用をまじふ

名 鴨年角より分よ信た信ふ 信

本庄まは虫觸の両玉をたて原氏は衣境は信
 信と信の信より衣をたれぬり信の信より
 信よ信を信件として衣を白の格をまじふ

信 信よ信の信より信ありて信 考

信 信よ信の信より信ありて信 考
 信の形容ありて信世に信ありて信件を信

△ 雑季格 季の信陽るを信

信 信よ信の信より信ありて信 考
 信よ信の信より信ありて信 考

信 信よ信の信より信ありて信 考
 信よ信の信より信ありて信 考

△ 雑井 北五条衣今信ありて信季格と信これと信

信よ信の信より信ありて信 考
 信よ信の信より信ありて信 考
 信よ信の信より信ありて信 考
 信よ信の信より信ありて信 考

傍若迷のわとて之僅十五丁の冊中ニ凡此不
字邊尺連ホありア其迷いうきわら

歳旦 卯の辰も及こりぬ 嫁り思 千角
、 思ふ代もあやや物世家の福福あ 許云

△半格 雁を嫁と稱て本の主嫁と云ふは
隠あつてある事一物世家の布袋福福あも
そ見使さる風情もあれも初吉の旦といとめて

△半格 敬あつては思入て吾妻の味を察あつて
古き 福吉て福吉と云ふるは 千角

△半格 善あつておと敷あり是を格外并雜体に入らるる
花丸 ちくたちちくたの笑いき さよ

△半格 二心のちりたるを憐むり喜の心と云ふ
いふ由て親しき人の心あつて

△半格 笈 意の信杖とあつたのむら系 箱
、 世の中のさうと宗祇の舎系

△半格 是時の古多たそ吳中ニ明もあつたり
、

△半格 此の只時の隠向ありよの中は此の時あり付と
あつて白多の信世の教想とあるは蓋は再案ら
け外あつて奉る 季を信 ち何はモ 季季格と
其心もあつたのて作の一件と

△半格 七浦や一字の数を一字りく 尺終

△半格 此の只時の隠向ありよの中は此の時あり付と
あつて白多の信世の教想とあるは蓋は再案ら
け外あつて奉る 季を信 ち何はモ 季季格と
其心もあつたのて作の一件と

△半格 此の只時の隠向ありよの中は此の時あり付と
あつて白多の信世の教想とあるは蓋は再案ら
け外あつて奉る 季を信 ち何はモ 季季格と
其心もあつたのて作の一件と

△百歌を雑とあるが同キ載不極

〔唐〕の歌は唐人の所出も古人を補意し約あり
 としむむ古抄の抄は後の用を分た只名目を
 雑とあるキとキの當りある所多し今い其白は
 其用をある雑と名めもあるは之使合粘じ
 とる必古抄の抄も去し唐詩二百の用を
 正しきといはれ難くして其成り同キを
 出さず今この法に及まざる

△其の所出を考へて今二百歌を雑とあるが載
 同キを雑と名めし其の雑とすり正しめられ
 其の支考も雑とて毎同キ載せざるを以て其
 なるの考の口を考へるは自注を引て得ざる

ハある雑と去を志す所の考の考 まらふ
 夕夕 水由りさねぬ思ふこそうき 号那
 手 まる雑と名めざるの考 須平
 雜わくし夫先の考あり馬 牛角

白兒

秘記一ツ又此作一き 古心
 必すイを分り難母さうあるは備註 占極

雑

一唐原抄とさつゝ歌又入意 山り
 抄の男たびの白さうよ 考友

仙

十 雑と名めざるの考 考友
 仙の角とつゝ考 考友

白息

麻の茂もくれんゝこ 天書
 舟なる浦に舟を信のる 札え

冬喜

白湖の傳の連さるるゆ 事え
 風も横さるたきもやけ 杉風

三笑

仏さへひらわの野の草もまじ 甚二
 と入念の傳りあはなすを 伯志
 夕きのつゝもたれて月夜 香原

三笑	三笑 笑の偏のつとあれ風情を 古賢	山吹	山吹 子供は何れ今の子種 栗ル	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳
菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳

菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳
菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳	菰	菰 菰の二葉のしるさ 柳

カイ脚注

三

音 桂のひんあつもせをわら 陰風
 陸を 雪よきさるいりーくさるき 志風
 類 いしーの世のたろやろく 丈志
 去 空をけろの只けよろも 旦志
 葉川 ありー人のええぬまのそ 支考
 百鳥 我尾いぢろの身のかろ木ち
 勻 解すえられけの心連て 海玄
 言白 草の何ちやとえろよん草 考五
 いちも何多うれとつわんおく古人の活用かので
 く千重る化して極あり人しこつ物とちて
 志と願きと新世ぬ人ろ

△ 兼之

兼のまの揺も兼之表の心何事よるもに二つあり
 或は兼さる方よるもの常キと出すは淋之
 ひさことと日月の所あり兼の方之をキ出るるを
 又よ又二つ兼の方よる去キとて一考事もの
 始あり初と淋之必あり二考事とて一考事

えのりつとそも表の内一季あつらうむ

ひき 兼の甲うううつらひもせす 乙抄

只年ふんし風のうく青 改取
 っろ兼の本持仕まいある末て り系
 〇 独わて更なるひき後の月 昌房

斗ふんの風を袖中の風とてやきやう
 枅 〇 月まの柳や花より子奴 支考
 面白き世り面白き人 君仲

不白に己キの常おとそりくるあよ三に乃
 あろろ何事。無あつむとかきて兼を
 つけ表の終る。無事あつぬや尺のしよ派お

あつぬ冬キをわしりん傍き扱と

三匹 他世のまゝを春の風の尻 涼ト
早の嵐の存のありき 支考
。おのゝ只おのゝとて並て 及朱
嵐の尾おのゝ水きと明くはゆら吹ゆ
曉とておのゝの歌おをけり

文意実教云仙

キキ 箱の底ぬきしきる一ニ足形 万子
墨車とあゝのねと見あり 伯志
ア十身仙十色イ業のし候て 甚二
、秋さゆめくも雲のりく 橋舟
。信向を自興の穴と月のみ 野ウ
云業十色の夜とて業阿の雨を文れとつカ子の
婿とれい又とと白せて才とくろあ十カ仙の
三月は二五の二月カ仙く是枝武の始とえ也
去ラ 妹さのうさも浮きの橋の雲や 二
殊さく淵をちりて 三三 梅え
△月えの雲をねとれりて 喜車

